**船舶工兵教育隊と広島原爆の想い出**

　四期生　西條康夫

　昭和十九年五月、陸軍少年戦車兵学校を卒業いたしました。赴任先は満州の勃利にある戦車第七聯隊と内定していましたが、実際には畑違いで、船舶工兵第九聯隊補充隊と言い渡され、和歌山市の教育隊に配属、卒業生五十名部隊長に申告の上、三ケ月の教育を受けた後、船舶砲兵・船舶通信・船舶工兵とそれぞれ転属となり、結果的には教育隊付の助教となり、召集兵、特別幹部候補生の教育に従事した。舟艇の繋留場所は和歌の浦、紀州水道に面し、波が高かったと記憶している。

時折り、米軍のグラマン戦闘機の機銃射撃を受け、木造の上陸舟艇の穴埋めが大変であった。昭和二十年六月広島県忠海に移駐し、忠海高校女学校を兵舎に転用し、ここでは

船舶特別候補生の教育に専念していたが、八月六日原子爆弾の投下によって、広島駅を中心とした広範囲が被爆し、見馴れた駅は鉄道線路とプラットホームだけとなっていたのに驚いた。当初は新型爆弾と報じられたが、爆弾の落ちた跡がないのに一面焼け野原であり、駅裏の練兵場で野営をしながら救助活動に入った。

　民間人の負傷者多く収容された国民学校。戦争中とはいえ其の悲惨さは、本当に筆舌に尽くし難いものがあった。「兵隊さん、水を下さい」と懇願する被爆者に「水を飲ませると死ぬ」と言われ、水を飲ませてやれず、火傷に塗る薬も十分になく、ただオロオロする状態で、夏の暑さと異臭の中での作業に、長い時間握り飯も喉を通らなかったが、川で溺れて死んだ人を救いあげ火葬に付した煙が真夏の夜に寂しく立ち昇っていった。この情景は今でも瞼の奥に焼き付いている。

　被爆死された人々の御冥福をお祈りする次第。

　何れしても、昨日まで都市として機能と活動を続けていた広島が一面焦土と化し、そこには焼き殺された人間がゴロゴロと転がり、生き残った人間が死体を収容すると言う悲しくも無残な作業を行わなければならなかった。廃虚の中で連日死体と接する炎天下の救助作業は、食欲もない疲れの取れない日々が続いた。

　八月十五日終戦の放送には、戦争に負けた悔しさもさる事ながら、家に帰れる事が嬉しく思われた。東北、北海道の者は一足先に帰れと言われ、九月三日広島の列車で故郷に戻る事になったが、乗り換えの為大阪駅で皆と相談、東海道本線で東京経由にするか、北陸本線新潟経由にするか、誰から伝わったか不明であるが、復員兵は米軍に捕らえられると言う話によって、全員が北陸経由と一致した。私は引率を命じられての帰りではあったが、新津駅で盤越西線に乗り換えるために、一行から分かれて無事故郷に帰る事を期待して別れた。

　私の郷里は仙台ですが、広島に居った時に、二十年三月に大空襲に見舞われた報道に接していた関係で承知していたのですが、会津若松駅で一晩明かし、九月五日郡山駅を経由して仙台に到着した。駅舎の面影は全くなくて、鉄骨に踏板を渡した跨線橋を経て帰宅した。

　仙台市は当時中央圏は焦土と化していたが、中央から外れた我が家は難を逃れており、母と妹が留守を守っていたのに感謝しカンパンニ袋を土産とした。

　何せ七十年前の事柄で、多少の思い違いや記憶のない部分もあったのではないかと思われるが、若獅子最後の投稿とさせて頂いた事に改めて感謝の意を表します。

　また、今日まで宮城県白糸会の連絡役としてお手伝い致しましたが、意に解されない事柄が多くあったと思いますが、吉留会長、國兼事務局長はじめ関係者に対し、心から感謝と敬意を表します。今後も健康に留意され人生を全うされますよう、ご祈念申し上げます。

（加藤純二記：西條康夫さんは元東北大学抗酸菌病研究所の事務長をされ、小生の診療所の最も古い患者さんであり、３０年以上、９２歳まで萩野町町内会長をされました。この紀行文は元陸軍少年戦車隊兵学校同窓会の最後の機関誌に投稿されたものです。）

